

海の神秘に 浅田舞さん 触れて深まる環境への想い

ダイビングに
夢中!



あさだまい 1988年愛知県生まれ。フィギュアスケーター。2003年、2004年世界ジュニア選手権連続4位。2006年四大洲選手権6位。妹は同じくフィギュアスケーターの浅田真央。現在、アイスショーなどに出演するほか、スポーツキャスターとしてテレビ、新聞などで活躍中。

フィギュアスケーターであり、現在はスポーツキャスターを中心に活躍する浅田舞さんには、ダイバーというもう一つの顔がある。初めてダイビングを体験したのは6年前。20歳のときだ。仕事で訪れた沖縄・慶良間諸島の海に潜り、それ以来、海の魅力にとりつかれたという。

海をとりまくさまざまな問題を目の当たりにし、環境への意識が芽生えたいまま、「自分ができること」を発信し続ける浅田さんに話を聞いた。

まさにジャングル！
海藻の森に大感激

今でもカナヅチだという浅田さんだが、不思議なことに、最初から海への恐怖はまったく感じなかったという。美しさに魅了された慶良間諸島・阿嘉島の海は、サンゴやウミガメ、カクレクマノミなど、さまざまな生物が生息する神秘的な世界が広がっていた。その世界に圧倒され、心が「無」になる感覚を味わう。たちまち海のとりこになった。

そして、昨年夏潜った下北半島・風間浦村易国間の海で、沖縄の海とはまった



鉄鋼スラグの活用で再生した海藻の森。巨大なコンブの中を泳ぐ浅田さん(下北半島・易国間)ダイビング撮影/©尾崎たまき

く違う感動に出会ったのである。そこは製鉄の過程で生まれる副産物、鉄鋼スラグと腐植土の混合物「ビバリー®ユニット」によって再生した海藻の森だった。「肉厚で巨大なコンブがもじやもじや生えていて、ただただ驚きましたね。まさにジャングルです(笑)」。人間の手で壊してしまった自然をまた人間の手で再生できる。そのことにとても感動しました。でも、鉄鋼スラグがない場所はコンブなどがまったくなく、枯れた世界だったのです」

目と鼻の先に展開する対照的な光景を目の当たりにし、がく然としたという浅田さん。易国間の海に海藻が減少し、代わりにサンゴモが繁殖する「磯焼け」と呼ばれ

る光景が広がったのは昭和50年代だった。水質の悪化や水温の上昇、そして易国間はウニの被害が大きかった。ウニが次々とコンブを食べ、コンブのない海で育ったウニにはほとんど身がないという悪循環。さらにコンブの減少は魚の減少につながり、コンブの森の再生は地元の漁師の死活問題でもあった。

易国間では鉄鋼スラグを用いて平成24年度におよそ100㎡、25年度に90㎡の藻場造成を行い、現在どちらもコンブが繁茂している。

まずは知ること
それが第一歩

「身近にある鉄を作るときにできる副産物が、コンブなど、海藻の役に立つなんて考えもしないですよね。まずはそのことに驚きました。易国間のような成果を知ってもらえると、びつくりする方も多いと思います。実際に潜って効果を自分の目で確かめると、鉄鋼スラグの藻場造成に携わった方たちの想いも強く感じました」

自然はもう一度人間の手で再生できる。ならば、きっと自分ができることもあるはず。——海への想いが

環境への関心につながっていったのは、自然の流れだった。

「沖縄の海の神秘的な世界と、磯焼けを人間の手で再生させた青森の海。その世界を自分の目で見て感じると、ゴミを持ち帰ることなど、当たり前なことをきちんと守らなければという気持ちが強くなりました。きれいな海に行ってもゴミは落ちていくんです。それはとても残念なことですよ。だから、身近なことから自分たちにできることを、どんどんやってほしいと思います」

目を輝かせて語る浅田さんの原動力は、新しい世界との出会いを心から楽しむ旺盛な好奇心のようだ。その好奇心に火がつき、伝えたいという想いが膨らむ浅田さん。

「取材をきっかけにダイビングをはじめ、海の中のことに興味をもちました。さらに、美しいだけではなく、環境問題などの様々な事実を知ったり、実際に自分の目で確かめる機会にも恵まれ、もともとと伝えたいという想いが生まれました。先ほどの鉄鋼スラグも、海によって必要とする成分が異なり、どこにでも設置すればよいわけではないです」

読書好きの浅田さんは、小説やエッセー以外にも実用書やメンタルの本などジャンルを問わず本に親しんでいる。また、初のグラビアに挑戦するなど、活躍の場や視野を広げている。「私は中高校生の時、フィギュアスケートしかやっていなかったのですが、その世界しか知らなかったのですが、その年代は色々なことにチャレンジして勉強できる時代だと思います。初めてのことは勇気もあるし不安もあるでしょうが、恐れずに色々なことにチャレンジして、触れる事は大事だと思います」



「エコプロダクツ2014」で、易国間のダイビング体験を語る浅田さん。等身大の言葉に、詰めかけた中学生らが熱心に聞き入った

うですし、いろいろ勉強になりました。やはり、地道な努力を重ねることが大切なんです。10代の若い人たちにも、人間の手で海を再生する取り組みを知ってもらい、身近に感じてほしいですね。そのためには、まず知ることが第一歩だと思います。すぐに成果は出ないかもしれませんが、知ること、自分の意識が変わってくるのがたくさんあると思えますから」

恐れずチャレンジ
してみよう